

<https://infokkkna.com/ironroad/2021htm/2021mutsu/fkobeR0310.pdf>



2000年代 同時代の読み方、不安社会を生きる、浪費なき成長—新しい経済の起点、＜節度の経済学＞の時代、もうひとつの日本は可能だ、〔共生経済〕が始まる、悪夢のサイクル、共生経済が始まる、日本の原産、どこで間違えたのか、荒野渺茫、誰のための改革か（編著）、〔人間復興〕の経済を目指して（共著）、ラテン・アメリカは警告する（共編）、城山三郎 命の旅（共編）、始まっている未来（共著）、大震災のなかで—私たちは何をすべきか（編著）、取り返しのつかないものを、取り返すために（共著）



没後1年・内橋克人の歩いた道

1

今がたまに捕虜人となつておにに
向かへて執筆者にうたひだしたのか
まだ。神戸新聞の編輯者の星書
膨大書籍の資料が並立、机には
N.H.のラジウム稿、電光へて
線引き、補記が書込まれ、
最後のメッセジとなつた。1
年1月1日放送、脱獄社会、日本
の経済を考へた。

急性心筋梗塞で救急搬送され方
は日後の4日。自身は婦宅で居
つていたのだが、次第に容
は化し、9月1日午後4時3分
となつた。享年89でそれから
妻とふたり85は話した。取りつ
ぐに前向きに走るべしとな、本
当は横柄かいです。真面目真つ
すへ行へたし。

1932、昭和7年、神戸市
誕生。神戸12歳のとき神戸市立
経蔵、神戸商業（現兵庫県立）
を卒業した57年、神戸新聞に入り
経記記者として歩みだした。以
1964年、第一本單行本「
最初の年間だけは神戸新聞に
属さず、つぎだ、いまが始めと
しているのか、それが未だを明する
ぞというとなのか。この調子他
の人より相草く、ある種のにお
で感じ取るべきである。になつ

国家や経済の大勢個人をわし
てはならない。現場を歩きながら
問が主人公の「日本経済」を説き続

書『アスガルドの神話』の序文に「この書は、
に止まる。計が示るのは大體、
えてある。計が示るのは大體、
発生時の5時頃。あの瞬間、浮
かびがたな空の斷面。五時時
には、地底にも生ずる。或多
まにその人の目触れるところ
裏の空間の姿に逼る。」
戦争、震災体験を、重厚にし
た自然的作品『洞野渺茫』
1年であった。「いま、暗
い時」への感性的な「度」は
地獄めたるのが、『戦前ある
もの』が新たな畏い、懺らむ
ものとして立ち上がり、荒い呼吸四圍
を封じ込める。(加藤正文)

12面に続く

筆一本真つすぐに生きた

高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。（加藤正文）

2022.9.1.
～2022.9.23.

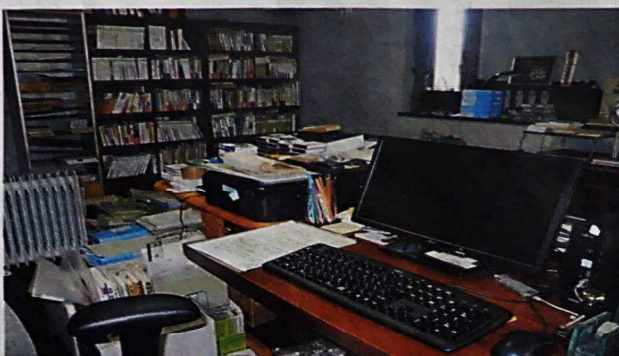
没後1年・内橋克人の歩いた道

1面から続く

内閣大入さんなら、いま高時代
にこんなメッセージを発したであ
ろ。収束が見通せないバテミツ
ク、世界的大流行、迫りくる気
候崩壊、ロシアのウクライナ侵攻
で戦争が現実となった。国内では
安倍晋三、元首相の銃撃事件が起き
た。揺れる世情にあつて、自衛すべ
きは必要はあります。ますます不朗にな
つてゐる。

陝な予兆

「時代状況として与える目が必要」が持論だった。歴史の証言として「昭和恐慌」を意識していた。1978年の「ドキメント」恐慌。失業、生活困窮、自殺。「追いつめられるごく普通の人々の生活」をあの「昭和恐慌」の時代を彷彿とさせる。社会不安の下、濱口雄幸、井上華之助、岡谷



本質見抜いた洞察力

「今日に明日をつなぐ人々の営みこそが経済の本質」。静かに語る内橋克人さん＝2003年、東京都千代田区

原理を働かせるには「ベネシ」
（技術革新）が起き、安定に経済成長が実現する。その大前提に対し、95の「規制緩和」と「悪夢」で米航空業界の美情情調へ、安全性は損なわれるもの、問題点を告発した。「企業行動の規制を外していくのですから、市民社会として抵抗の術がなくなる。そして、ついに、そのときを

す」が地獄で響き、今未来を見過ごしていた。「尊敬が、能わざる企業」「共生の大地」「すゝみとつ」の日本は可能だ」「始まつている未来」……。題名から内容にマンが立ち上つてゐる。

年80年代)では人と技術の接合領域に光を当てた。一世を風靡したNHK番組「プロジェクトX」より20年以上以上前のアプローチだった。

■規制緩和と万能論の虚妄

90年代、バブル経済が崩壊したと後、規制緩和と万能論が声高に叫ばれた。労働法制など各分野で市場

「われわれは肝に銘ずるべきです」

【例外なき規制緩和】は何をもたらしたか。非正規雇用は働く人の4割近くになり、格差拡大を招いた。大規模店舗の相次ぐ進出で地域の商店街や市場ではシャッター通りが増え、疲弊の中にある。現実の経済社会と切り結びながら、持論の「生きる・働く・暮らす」

(タイトルは単行本時。文庫化時に変更あり)

1960年代 外資のなかのニッポン

2000年代 同時代の読み方、不安社会を生きたる、浪費なき成長
新しい経済学、高度の経済学への時代、必
しむる日本は可能た、(共生経済)が始まる、豊
裕のサイクル、共生経済が始まる、日本の発展、
で間違えたのか、荒野遊学、誰のための改革か
(編著)、「人間復興」の経済を目指して(共著)、ラテン
アメリカは警告する(共編)、城山三郎 金の旅(共編)
始まっている未来(共著)、大震災のなかで—私たちが
何をすべきか(編著)、取り返しのつかないものを、
を取り返すために(共著)

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

2

取材に駆けつけていた頃の内橋克人さん。記者時代から現場取材を原則にして

「技術はちやうど地下の伏流水のように、いつか商品や時代の流れを変えてしまつてことになるんだ。若いエンジニアたちが議論を交わす（「電卓戦争の軌跡」シャープ・カシオ）。「お前たち、自分は旋盤工として採用されたんだ」と思え。現場を知らない技術者なんて、ウチでは不要なんだから」。現場に発想の原点がある（「セイコー・クォーツの世界」）。

■あふれるリアリティー

内橋克人さんの出作となった「匠の時代」。1978（昭和53）年に夕刊フジで始まった連載は一躍脚光を浴びる。新しい原理を見だし、手法革命に情熱を傾ける匠たちの群像。緻密な取材に基づく臨場感豊富なエピソード、情感あふれる文章。連載はシリーズ化され、後に12冊の文庫になるほどの生命力を持った。40年を経た今も瑞々しい。

当時、夕刊フジの経済担当部長だった島谷泰彦さん（8月に90歳で死去）は内橋さんや作家高杉良さん、評論家佐高信さんら後大成する書き手を積極登用していく。中でも同じ年の内橋さんを高く評価し、企画を仕掛ける。「匠」という言葉になじみが薄かった時代だ。上り下りしたブルの階段、くへった場の門、歩いた生産現場、語り合った技術者たち。取材は果敢に成功したが、悪戦苦闘だった。執筆の内橋さんの疲労度は到底、私の及ぶところではなかった。粘りに粘つてほしい

匠の時代



あげた人間ドラマはリアリティーにあふれた。

■目撃論への賛賞

80年代初頭、バブル経済に向かう時期日本企業の技術は米欧を越え超一流だという「目撃論」が盛り上がりつつ。戦後の「追いつき追い越せを言葉に登った頂で得た」ジ



夕刊フジの名編集者として内橋克人さんら書き手を育てた島谷泰彦さん（2010年）

地域と響く「実の技術」

ヤパン・アズ・ナンバーワン」という賞辞に酔った。

危機感を抱いた内橋さんは「幻想の『技術』流国ニッポン」（82年）を出す。日本企業の強みは生産現場で発揮される労働や技能の質に依存する傾向が強い。その現状に触れつつ、弱点として真の創造技術を育む風土の脆弱さを指摘した。教育、生産構造、研究体制。『アメリカを超えた』などと言わず、せめて高度のオリジナリティーを求める技術開発努力や独創的技術への挑戦をもっと真面目に評価する姿勢を持つことが、『目撃論』から覚醒する道であるよう思われる。

それから約40年たったいま製造業の現実はどうだろうか。競争力は低下し、市場を席巻する製品はなかなか生まれないうばかりか、大企業で不祥事が後を絶たない。検査不正、データ改ざん、捏造、法令違反、リコール（回収・無償修理）…生じた集約は次第に広がり、破綻に至る。そんな惨状を思わせる品質の劣化は日本企業の病巣となった感がある。

「科学と技術と技能、そして人間と組織と地域社会、それらの間を結ぶ強い絆、そして未来を望むことの大きさに改めて再確認したい」。内橋さんが追求したのは実物、実需、実体と根柢した「実の技術」だ。メッセージはいまも切実に響く。

（加藤正文）

匠の時代 夕刊フジの連載をまとめて「究極的関係者たちの実像」を副題に1978年に刊行された。シリーズでは三菱機軸下電器産業現パナソニック、IBM、ホンダ、ミルタ、東レを世間が目を覚ました技術革新を人間ドラマとして描いた。講談社文庫、岩波現代文庫。

神戸新聞2022.9.2.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

3

市場原理至上主義批判を行った内橋克人さん。神奈川県鎌倉市の自宅書斎（2014年）

内橋克人とグループ「2001」。チームによる調査報道「規制緩和という悪夢」は1994（平成6）年7月から雑誌「文藝春秋」で3回シリーズで掲載され、バブル崩壊後の日本社会に衝撃を与えた。「ことと規制緩和に関するかぎり日本の各メディアは、『規制緩和こそ日本経済を救う』という経済学者の説を最初から正しいものとして鵜呑みにし、事実の検証というジャーナリズム本来の仕事をしていなかった。ここに私たちの仕事があると考えた」

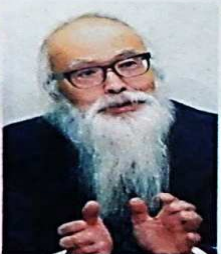
■万端論に潜む危うさ

当時の平野外四経団連会長を座長とする細川護国首相の私的諮問機関「ゆるぎ平野研究会」の答申は「経済的規制は原則自由、社会的規制は『目撃論』を原則に最小限に」。日本社会を救う万端論としてもはやされた。

内橋さんは60代初め。百戦錬磨の眼力は礼賛論に潜む危うさを見逃さなかった。チームは先行した米國を調査し、新産業は本場に生まれるか▽雇用はどうなるのか▽アメリカの狙いは何かを詳細に調べた。「日本の規制緩和運動はいわば大変危険な劇薬を患者に副作用を全く知らせず投与しようとしているのと同じ」。

恩恵は権力の決定機構に近い投資家、大企業、都市生活者に行く。他方中流層をなす労働者、中小企業、地方生活者、年金生活者は「激流の中に放り出され、多くの人が辛酸を嘗め（の）ことになる（の）」。

規制緩和という悪夢



宇沢弘文さん（1928〜2014年）。数理経済学者。社会的共通資本の思想で内橋克人さんと共鳴した（1995年）



経済学の在り方を問う

共同体が壊れる構図だ。「市場が人間を支配する思想が背景にある」として市場原理至上主義、新自由主義をあげ、その源流を採った。

■共生経済という対抗軸

「経済学は誰のためにあるのか」という問いを胸に内橋さんは経済学者にインタビュしていく。宇沢弘文、岸本重典、佐和隆光、熊沢誠、西川潤といった碩学たちだ。規制緩和と礼賛論はあるべき日本経済論、社会論を見失っているのではないか。経済学はこれをどうたすのか。

「内橋さんは自由な一人の人間として、現在起こりつつあることを冷静な目で見て、アヒルコックな形で提示してくださる」。経済学者で最も深く通じたのが宇沢さんだった。成長理論で業績をあげ、ソローやステイグリッツら自たる経済学者に影響を与え、フーバー経済学賞に最も近い日本人と目された数理経済学の泰斗だ。

宇沢さんが目指す経済社会の根幹として打ち出したのが「社会的共通資本」という概念だ。自然環境やインフラ、金融、教育、医療を経済学で捉え直し、「人間が人間らしく生きていける社会の器」「コモンズ」と位置づけた。市場は万能という言説への対抗軸であり、内橋さん提唱の共生経済と軌を一にするものだった。2人の対談は「始まっている未来、新しい経済学は可能か」として09年に刊行された。（加藤正文）

規制緩和という悪夢 1995年刊。続編「悪夢のサイクル」ネオリベリズム循環（2006年）。市場原理至上主義批判は内橋さんの終生のテーマになった。経済学は誰のためにあるのか（1997年）もアカデミズムとジャーナリズムをつなぐ書。

神戸新聞2022.9.3.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

⑥

記者会見で「原発にさようなら集会」について説明する（左から）内橋克人さん、澤地久枝さん、内橋克人さん
 2011年6月、東京都千代田区

シニアアシスタント。原子力発電所が設計時の想定を超えて過熱な状態に陥る事故の元凶。米スリーマイルアイランド原発事故（1979年）、旧連のチェルノブイリ原発事故（86年）、東京電力福島第1原発事故（2011年）が該当する。

内橋克人さんはスリーマイルアイランド事故から3年後の1982（昭和57）年、「週刊現代」で原発をテーマに長期連載を始めた。終生、原発の危険性を指摘し続けたが、その原点となった取材は、「いわゆる原発賛成派でもなければ、まして反対派でもなかった。どちらからの情報もマルガミみせず、自分の目と足と頭で冷静に確かめる」というエネルギーを、原子力発電に対してきしめた。ただそれだけだった。

■スロー・デス

技術、放射線と人体、補助金、PR戦略、政権与党との関係、発電コスト比較。地域開発は人を幸せにするのか。その筆は次第に厳しさを増す。後の過酷事故を予見したかのよう。福島第1原発の取材は詳細をきわめた。地元福島県双葉町の町会議員の言葉をすくいあげる。「ボルトに原発が安全なら、東京のまん中だっただろうに」

原発への警鐘



原発問題の連載を本誌にまとめた。当時52歳。精力的に取材に飛び回っていた。1984年、米ボストン（提供）



「帰らざる河」渡った末に

見えてきたのは安全神話がつくられていく構図だ。「国がやることだから大丈夫」と囁かれる国策の太鼓。著名人にヘルメットをかぶせて構内で撮影し、安全性をPRさせるメディア戦略。「恐るべき『日本の曖昧さ』と『無知の傲慢』に支えられて、ひとり原発は肥大化のビッチを上げ、立ち止まる暇も振り向く余裕もないまま、日本人は原発超大国への帰るざる河を渡ってしまった」

■合意なき国策

2011（平成23）年3月11日。東日本大震災発生。巨大複合災害として福島第1原発事故が起きた。幾多の警告が葬り去られた末の「人災」だった人々の魂に根差す平衡感覚、鋭敏な危険察知能力、生あるものに必須の畏怖心、事故が示したのはそれらすべてを焼き固め、鋳型の中にねじ伏せて突進しよとする刻み出しの権力の姿に違いない。6月15日、記者会見の席に内橋さんの姿があった。作業者地味な服装、ヘルボライター、細田さんとともに声を上げた「原子力政策は合意なき国策だ。活動期に入った地震列島日本を原発過剰列島にしない」

それから11年が過ぎた。政府はこれまで増設や建て替えは想定しないとしていたが、次世代型原発の建設を検討する方針だ。回帰というべきエネルギー政策の転換が行われようとしている。（加藤正文）
 ◇今回は16日に掲載します。

原発への警鐘 1986年、講談社刊。雑誌連載をまとめて84年に刊行した日本エネルギー戦争の現場を文庫化した。福島第1原発事故の際には同書を部分収録した日本の原発とて間違えたのかを出した。朝日新聞出版刊。原発を取り巻く状況を多角的に取材・分析し、安全神話を警鐘を鳴らした。

神戸新聞2022.9.14.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

⑦

各地を取材で訪れた内橋克人さん。海や山を境界の隅にとらえながら、すでに始まっている未来を現実の中に探りたいと願った（提供）

北海道の北東の端、オホーツク海沿岸から道庁に沿って奥に入る。滝上町。ここにかつてあった駅を保存した記念館がある。小さな駅舎、線路、駅舎標識。赤いローカル線廃止対象として鉄路が消えから約10年後の1994（平成6）年、内橋克人さんが取材に訪れた。

鉄道をつたった町は自らの道を選んだ。平成の大合併に抗い、芝桜の名所として今集め、赤い三角屋根の建物に配して「道庁」をテーマにまちづくりに取り組んだ。「都へと繋ぐ心の絆をつたった同じ境遇の過疎地、中間地、僻地、また地場産業を訪ね、荒れ時代の風立ち向かう人びとの悲嘆と勇気、逞しい想像力、健気な日常の物語を紡いだ。日本経済新聞で連載された「共生の大地」は注目を集め、岩波新書になった。滝上町のルガを収録した書を『辺境と周縁の条理』と名づけ、扉に廃駅の写真を選んだ。

■生きる・働く・暮らす
 95年の阪神・淡路大震災以降、論調に変化が出てくる。規制緩和と能を切った90年代の長期不況の実態を見据え、市場原理一辺倒からの脱却の意義を確信に満ちて唱えるようになった。著書が続いた。「浪費なき成長」「節度の経済学」の時代「もう一つの日本は可能」

「共生経済が始まる」。当時、市場原理の対抗勢力として経済学者の宇沢弘文さんは社会共同資本、宮本憲一さんは経済的発展、維持可能な社会を打ち出した。時を経て気候

周縁の条理



保存された滝上線のレールと標識。内橋さんは地域再生に挑戦する住民たちの姿を追った（北海道滝上町提供）



もう一つの日本は可能だ

働く・暮らすの二つが地域で重なり合う共生セクター。周縁目を凝らし、周縁に向かう。二つの日本と一つ一つの日本を分かつ断崖の裂け目は、いよいよ地殻の奥底にまで達したように私には思われる

■FEC自給圏の形成

当時、NHK番組「クロスアツ」現代のキャスターを務めた国谷裕子さんに刻まれているのがFEC（フェック）自給圏という構想だ。フーズ食料・農業、エネルギー、ケア（介護・コミュニティ）の三つを地域内で自給していく社会。この三つは市場原理に委ねてはいけない。市民が手放してはいけないんだということを四半世紀前に言いだしておられた

東日本大震災の起きた2011年の10月17日放送の「自給力！食とエネルギーを自給する暮らしの可能性」で新たな動きを示す映像の後、内橋さんはこれはスカルシアではなく日本の未来を先取りした姿だと述べた。国谷さんへ返す。FECは基礎的な生存条件であり、そこにたつた上で地域に基幹産業も生み出せ、雇用機会も生まれ、尊厳ある労働につながる。必要なのが自覚的消費者だ。一人一人が、考える消費者になつて「買」いう行為で地域を支えよう。内橋さんが繰り返して伝えてくれたメッセージだ。（加藤正文）
 ◇今回は21日に掲載します。

FEC自給圏の形成 フーズ、エネルギー、ケアの頭文字を合わせた。内橋克人さんが提唱した自給自足圏を基盤とした経済社会「消費なき成長」（2000年、光文社）などに詳しい。「共生の大地」（1995年、岩波新書）、「同時代への発言6 周縁の条理」（99年、岩波書店）は地場再生の胎動を描く。

神戸新聞2022.9.16.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

⑥

「人間復興」の経済を目指して 城山三郎さん、内橋克人さんの対談集。2002年、朝日新聞社。ほか2人への対談は「失われた志」(文芸春秋)。

2005(平成17)年8月20日午後、郵政館に打って出た小泉純一郎首相(当時)が神戸・元町を遊覧に訪れ、大観衆を前に演説した。同じく内橋克人さんは近くのホールで語りかけていた。「今、議員のこの立場、その声なき人々の声、力なき人々の力で満たされている」。神戸大空襲を語る会での講演だった。

その60年前の3月17日、大空襲で神戸の西半分が焼かれた。死者2600人以上。当時12歳の内橋さんはその前日、虫垂炎を発症し入院した。本来優秀なはずだった自宅裏の防空壕の席に母親代わりのような女性が座った。そこに焼夷弾が直撃し、爆は離れた。父が振り返った。「身を少し傾け、泥にまみれ、眠ったように倒っていた。打たれた肩の形は崩れ、赤黒いものが半身をべったりと覆っていた」(「荒野遊記」)。

身代わりによって自分の生がある。終生、胸に抱き続けた。

「権威と民権」「改革なくして成長なし」「自民

「人間復興」の経済を目指して

権威によって増幅される時代の流れ。異変を告げるものは排除される。「戦争前、戦後に戻された国民は熱狂し、鬼畜米英を撃つ」と叫び、街なかを行進した。少年の目に刻まれた光景。権威、権力に逆く、自らに合わせたい。そうした日本人の心性を捉え、野取さんは「頂点同調主義」と呼んだ。危うさを知る内橋さんは振り返った。「私たちの社会は戦前戦後変わっていない。強いものに逆く、弱い者には強い。なぜ?」と問えないのか。「私はここに大きなテーマをみている」。



神戸市東部の体験を語る内橋克人さん。頂点同調主義にあらためられた私たち日本人の弱さ、再びその弱さが色濃く表出してきた。2005年8月、神戸市中央区。



「頂点同調主義」の危うさ



作家 城山三郎さん

■城山三郎さんとの対談 敬愛し、対談を重ねたのが5歳年上の作家城山三郎さん(1927-2007年)だった。少年兵に志願した海軍で徹底的に個を押しつぶされた組織のために逃げられる個人。戦後社会も個が置きざりにされる。組織と個人をテーマに経済小説の新境地を切り開いた。自由な情を脅かす風潮と対峙し、晩年には個人情保護法の制定時に「憲法に反する」と反対の議論を張った。「戦争で日本が得られたものは甚だけだ」が持論だった。

内橋さんは城山作品を鋭く読み解き、戦争と国家と並立重要視し、経済発展に注目した。昭和恐慌から開戦に至った過程を踏まえ、バブル崩壊後の90年代不況がなぜ平成恐慌に至る手前で防ぐことができたのか。「戦争放棄の憲法9条、生存権の25条が阻止めになった」と言及し、城山さんは返した。「全く同感だ」。

2人は雑誌「論議」の企画で3回にわたって対談した。大失業者時代、敗者復活のある社会、昭和恐慌と平成恐慌、をテーマに語り合い、対談集「人間復興」の経緯を描いてを出した。

◇次回は23日に掲載します。(加藤正文)

未明の大空襲で建物が焼け落ち壊れくさぶさの中を歩き交る市民ら(1945年昭和20年3月17日、朝日新聞)。神戸市東部の体験を語る内橋克人さん。

神戸新聞2022.9.21.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

⑦

民主主義をあきらめない 岩波ブックレット、2015年刊。鎌倉・九条の会で行った講演を収録した。ものを、取り返すために(11年)も。同会は05年発足。大橋三郎さん。

く春を止めることはできない」。講演はブックレット「民主主義をあきらめない」に収録された。

■最後まで発言

民主主義をあきらめない

21年7月2日、89歳になった。体調がすぐれず、月々、心臓が苦しくなってきたが、病院に行かず機になつて過ごした。8月1日朝、NHKラジオ「マイあさ」に出演した。柔らかな本質を突くラジオでの経済評論は人気で長年続いていた。この日のテーマは「脱炭素社会・日本の針路を考へる」。質問と回答を書いたシナリオに、聞き取りやすいように区切りの記号も入れ、強調すべき箇所はひととき強く電光を引いた。気候変動に伴い世界各地で自然災害が頻発している状況から脱炭素とし、温室効果ガスの削減に努め、脱炭素社会の実現に向けて「石炭火力の問題に絞る」とりわけ「石炭火力の問題に絞る」とスを入れた。

1982(昭和57)年に原発を取材し「原発への警鐘」を刊行。エネ



書庫の机の上に置かれた最後のラジオ出演の原稿。番組のファンは多く、亡くなった後は3回にわたってアンコール放送があった。神戸市東部の体験を語る内橋克人さん。



若き日の内橋克人さん。神戸新聞記者時代にたまたま出会った記者三訓を胸に抱いて、数々の著書を出した(提供)

状況に強い危機感 最期まで



講演する内橋克人さん。晩年、兵庫で過ごす日々を熱く語った。2018年1月、姫路市。

ルギーを取り巻く政治財の問題に精通していた。「日本では口では『脱炭素』を唱えながら実際には例えは『効率的な火力発電(シフト)』などと平気で口にする識者が大手を振っているのだからです」と書かれたシナリオにべんを書き足した。「石炭火力をどう見直していくか。今朝のテーマもそれに尽きると思います」。放送3日後の8月4日、急性心筋梗塞で救急搬送され、入院。9月1日、息を引き取った。最期まで書きたいという思いだったという。

今年7月末、一周忌を前に内橋さんのお宅を訪ねたとき、書庫に向かう廊下の隅に封筒が立かけてあるのに気付いた。表紙には自筆で「記者三訓 ジャーナリストの心構え」と書かれていた。1957年、神戸新聞で記者として歩き出したころ先輩からたたき込まれた鉄則だという。「必ず現場へ行き、自分の目で確かめる」「上(権威や上司)を向いて仕事をやるな」「攻める側ではなく、攻められる側に最後まで諦めとどまれ」。この三訓を胸に戦後社会の険しい道を歩いた。首尾一貫した見事な人生だった。

◇◇◇ (加藤正文) 〓〓〓

神戸新聞2022.9.23.朝刊より

共生の大地へ 没後1年・内橋克人の歩いた道

(1) 荒野渺茫 (びょうぼう) 筆一本、真っすぐに生きた

2022.09.01



柔和なまなざしで経済社会の本質を見続けた＝2007年、大阪市北区



内橋克人さんの書斎。たゆまぬ努力で取材と思索を重ね、膨大な著作を世に出した＝2022年7月31日、神奈川県鎌倉市

今しがたまで内橋克人さんが机に向かって執筆に打ち込んでいたかのようだ。神奈川県鎌倉市の自宅書斎。膨大な書籍と資料が並ぶ。机上にはNHKのラジオ用原稿。蛍光ペンで線を引き、補足が書き込まれている。最後のメッセージとなった2021年8月1日放送「脱炭素社会－日本の針路を考える」だ。

急性心筋梗塞で救急搬送されたのは3日後の4日。自身は帰宅できるつもりだったというが、次第に容体は悪化し、9月1日午後4時37分、亡くなった。享年89。それから1年。妻泰子さん(85)は話した。「真っすぐに前を向いて走る人でしたね。本当に横向かないです。真面目に真っすぐ行く人でした…」

1932(昭和7)年、神戸市須磨区生まれ。12歳のとき神戸空襲を経験。神戸商科大(現兵庫県立大)を卒業した57年、神戸新聞に入り、経済記者として歩みだした。以来64年、筆一本で駆け抜けた。

「最初の7年間だけは神戸新聞にいたが、その後はいかなる組織にも属さずやってきた。いま何が始まっているのか、それが未来を明るくするいい芽なのか、逆にこれは危ないぞということなのか。この識別



「今日に明日をつなぐ人々の営みこそが経済の本質」。静かに語る内橋克人さん＝2003年、東京都千代田区

経済評論家 内橋克人 主要作品リスト (タイトルは単行本時。文庫化時に変更あり)	
1960年代	外資のなかのニッポン
1970年代	恐るべき外資企業、豪商への挑戦、挑戦する幹部、伝説の日本人、危機こそ好機である、「安宅劇場」以後、恐慌、匠の時代シリーズ(～1980年代)
1980年代	隆盛の証、ニッポン地球時代、幻夢の「技術一強国」ニッポン、社長辞典、日本エネルギー戦争の現場、考える一族、カシオ西兄弟、「重厚長大」の復興、原発への警鐘、ガンを告げる機関、「手法革命」の時代、ジャパン・システム激変の新図式、選り取りの研究、KKニッポンを創る(共著)
1990年代	尊敬おろけむる企業、「革新」已む能わざる企業、隔より始めよ、破綻が再生か、共生の大地、内橋克人同時代への発言(全8巻)、「会社本位主義」をどう超える(共著)、日本会社原典(共編著)、現物経済という悪夢(共編著)、大震災復興への警鐘(共著)、経済学は誰のためにあるのか(編著)、現代日本文化語・仕事の創造(共同編著)、現物経済 何をもらわずに(共著)
2000年代	同時代の読み方、不安社会を生きる、浪費なき成長～新しい経済の起点、＜節度の経済学＞の時代、もうひとつの日本は可能だ、「共生経済」が始まる、悪夢のサイクル、共生経済が始まる、日本の原発、どこで間違えたのか、荒野渺茫、誰のための改革か(編著)、「人間復興」の経済を目指して(共著)、ラテン・アメリカは警告する(共編)、城山三郎 命の旗(共編)、始まっている未来(共著)、大震災のなかで～私たちは何をすべきか(編著)、取り返しのつかないものを、取り返すために(共著)

神戸新聞NEXT

を他の人より相当早く、ある種において感じ取ることができるようになった」

国家や経済の大義が個人を脅かしてはならない。現場を歩きながら人間が主人公の「共生経済」を説き続けた。信念の原点となったのが大切な人の命が奪われた神戸空襲であり、その半世紀後の阪神・淡路大震災だった。

書斎のデスクトップパソコンの後ろに止まったままの掛け時計が横たえてある。針が指し示すのは大震災発生時刻の5時46分。あの瞬間、浮かび上がった社会の断面。「平常時には深い地底にもぐったまま、滅多(めった)なことで人の目に触れることのない真の『断層』の姿に違いない」

戦争と震災の体験を二重写しにした自伝的作品「荒野渺茫(びょうぼう)」(2013年)でつづった。「いま、『暗い時代』への予感は的中し、一度は地に埋めたはずの『戦中・戦前なるもの』が新たな装いを凝らしてむくむくと立ち上がり、荒い呼吸で四囲(しい)を封じ込める」



■本質見抜いた洞察力

内橋克人さんなら、いま同時代にどんな

メッセージを発しただろう。収束が見通せないパンデミック(世界的大流行)、迫りくる気候崩壊、ロシアのウクライナ侵攻で戦争も現実となった。国内では安倍晋三元首相の銃撃事件が起きた。揺れる世情にあって目指すべき社会の姿はますます不透明になっている。

■危険な予兆

「時代状況としてとらえる目が必要」が持論だった。歴史の証言として「昭和恐慌」を意識していた。1978年の「ドキュメント恐慌」。失業、生活困難、自殺…。「追いつめられるごく普通の生活者の姿は、あの『昭和恐慌』の時代を彷彿(ほうふつ)とさせる」。社会不安の中、濱口雄幸、井上準之助、団琢磨らを襲ったテロとなり、戦争と軍国主義への道

に至った。「暗い時代の危険な予兆。恐慌が高じて戦争に至る」と評論家の佐高信さん（77）との対談で語った。

終生、権力におもねらず、市井の人々の目線で現状を分析し、警鐘を鳴らした。「市場と権力」「資本主義と闘った男」を書いたジャーナリスト佐々木実さん（56）は「経済ジャーナリズムでは経営者目線や当局目線になり、ビジネス情報の領域で処理されることが多い。社会的な視点に立って経済を語る人は極めて稀（まれ）で内橋さんはその極めて稀な先達（せんだつ）だった」。

時代を見抜く慧眼（けいがん）と洞察力。出世作となった「匠（たくみ）の時代」（78年～80年代）では人と技術の接点領域に光を当てた。一世を風靡したNHK番組「プロジェクトX」より20年以上前のアプローチだった。

■規制緩和万能論の虚妄

90年代、バブル経済が崩壊した後、規制緩和万能論が声高に叫ばれた。労働法制など各分野で市場原理を働かせればイノベーション（技術革新）が起き、安定した経済成長が実現できる。そうした言説に対し、95年の「規制緩和という悪夢」で米国航空業界の実情を調べ、安全性が損なわれるなどの問題点を告発した。「企業行動の規制を外していくのですから、市民社会としては抵抗の術がなくなる。こうしたリスクがあることを、われわれは肝に銘ずるべきです」

「例外なき規制緩和」は何をもたらしたか。非正規雇用は働く人の4割近くになり、格差拡大を招いた。大規模店舗の相次ぐ進出で地域の商店街や市場ではシャッター通りが増え、疲弊の中にある。

現実の経済社会と切り結びながら、持論の「生きる・働く・暮らす」が地域で響き合う未来を見通していた。「尊敬おく能（あた）わざる企業」「共生の大地」「もうひとつの日本は可能だ」「始まっている未来」…。題名から内橋口マンが立ち上ってくる。



9月1日で没後1年になる。戒名は「志峯院巖岳良克居士」。高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。（加藤正文）

【内橋克人】（うちはし・かつと、1932～2021年）神戸市生まれ。神戸商科大（現兵庫県立大）卒。神戸新聞経済部記者を経て独立。著書多数。神戸新聞客員論説委員も務めた。

【特集ページ】 [経済評論家 内橋克人を読む](#)

共生の大地へ 没後1年・内橋克人の歩いた道

(2) 匠の時代 地域と響く「実の技術」

2022.09.02



取材に明け暮れていた頃の内橋克人さん。記者時代から現場取材を鉄則にしていた（提供）



「技術はちょうど地下の伏流水のように、いつか商品や時代の流れを変えてしまうことになるんだ」。若いエンジニアたちが議論を交わす（「電卓戦争の軌跡－シャープとカシオ」）。「お前たち、自分は旋盤工として採用されたんだ、と思え。現場を知らない技術者なんて、ウチでは不要なんだから」。現場に発想の原点がある（「セイコー・クオーツの世界」）。

■あふれるリアリティー

内橋克人さんの出世作となった「匠（たくみ）の時代」。1978（昭和53）年に夕刊フジで始まった連載は一躍脚光を浴びる。新しい原理を見だし、手法革命に情熱を傾ける匠たちの群像。緻密な取材に基づく臨場感、豊富なエピソード、情感あふれる文章…。連載はシリーズ化され、後に12冊の文庫になるほどの生命力を持った。40年を経た今も瑞々（みずみず）しい。

当時、夕刊フジの経済担当部長だった島谷（しまや）泰彦さん（8月に90歳で死去）は内橋さんや作家高杉良さん、評論家佐高信さんら後に大成する書き手を積極登用していく。中でも同い年の内橋さんを高く評価し、企画を任せる。「匠」という言葉になじみが薄かった時代だ。上り下りしたビルの階段、くぐった工場の門、歩いた

夕刊フジの名編集者として内橋克人さんら書き手を育てた
島谷泰彦さん（2010年）

生産現場、語り合った技術者たち…。「取材は結果的に成功したが、悪戦苦闘だった。

執筆者の内橋さんの疲労度は到底、私の及ぶところではなかった」。粘りに粘ってすくいあげた人間ドラマはリアリティーにあふれた。

■自賛論への警鐘

80年代初頭、バブル経済に向かう時期、日本企業の技術は米欧を超え、超一流だという「自賛論」が盛り上がっていく。戦後の「追いつき追い越せ」を合言葉に登った頂で得た「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という賛辞に酔った。

危機感を抱いた内橋さんは「幻想の『技術一流国』ニッポン」（82年）を出す。日本企業の強みは生産現場で発揮される労働や技能の質に依存する傾向が強い。その現状に触れつつ、弱点として真の創造技術を育む風土の脆弱（ぜいじゃく）さを指摘した。教育、生産構造、研究体制…。「『アメリカを超えた』などと言わず、せめて高度のオリジナリティーを求める技術開発努力や独創的技術への挑戦を、もっと真面目に評価する姿勢を持つことが、『自己幻想』から覚醒する道であるよう思われる」

それから約40年たったいま製造業の現実はどうだろうか。競争力は低下し、市場を席卷する製品はなかなか生まれないばかりか、大企業で不祥事が後を絶たない。検査不正、データ改ざん・捏造（ねつぞう）、法令違反、リコール（回収・無償修理）…。生じた亀裂は次第に広がり、破断に至る。そんな惨状を思わせる品質の劣化は日本企業の病巣となった感がある。

「科学と技術と技能、そして人間と組織と地域社会、それらの間を結ぶ強い絆、そして未来を望むことの大きさについて再確認したい」。内橋さんが追求したのは実物、実需、実体に根差した「実の技術」だ。メッセージはいまも切実に響く。（加藤正文）

【匠の時代】夕刊フジの連載をまとめて「先駆的開発者たちの実像」を副題に1978年に刊行された。シリーズでは三菱電機、松下電器産業（現パナソニック）、IBM、ホンダ、ミノルタ、東レなど世間が目を見張った技術革新を人間ドラマとして描いた。講談社文庫、岩波現代文庫。

【特集ページ】[経済評論家 内橋克人を読む](#)

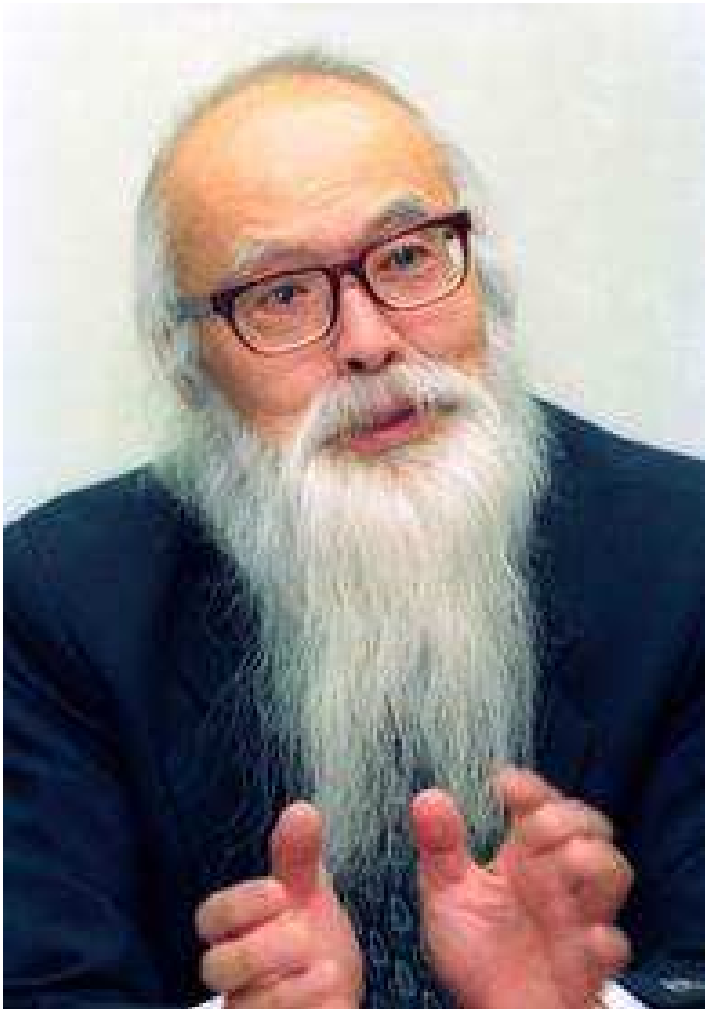
共生の大地へ 没後1年・内橋克人の歩いた道

(3) 規制緩和という悪夢 経済学の在り方を問う

2022.09.03



市場原理至上主義批判を行った内橋克人さん＝神奈川県鎌倉市の自宅書斎（2014年）



宇沢弘文さん（1928～2014年）。数理経済学者。社会的共通資本の思想で内橋克人さんと共鳴した（199

内橋克人とグループ二〇〇一。チームによる調査報道「規制緩和という悪夢」は1994（平成6）年7月から雑誌「文藝春秋」で3回シリーズで掲載され、バブル崩壊後の日本社会に衝撃を与えた。「こと規制緩和に関するかぎり日本の各メディアは、『規制緩和こそ日本経済を救う』という経済学者の説を最初から正しいものとして鵜呑（うの）みにし、事実の検証というジャーナリズム本来の仕事をしてこなかった。ここに私たちの仕事があると考えた」

■ 万能論に潜む危うさ

当時の平岩外四経団連会長を座長とする細川護熙（もりひろ）首相の私的諮問機関、いわゆる平岩研究会の答申は「経済的規制は原則自由に、社会的規制は〈自己責任〉を原則に最小限に」。日本社会を救う万能薬としてもてはやされた。

内橋さんは60代初め。百戦錬磨の眼力では礼賛論に潜む危うさを見逃さなかった。チームは先行した米国を調査し、新産業は本当に生まれるか▽雇用はどうなるのか▽アメリカの狙いは何か－を詳細に調べた。

「日本の規制緩和運動はいわば大変危険な劇薬を患者に副作用を全く知らせず投与しようとしているのと同じ」。恩恵は権力の決定機構に近い投資家、大企業、都市生活者に行く。他方、中流層をなす勤労者、中

5年)

小企業、地方生活者、年金生活者は「激流

の中に放り出され、多くの人々が辛酸を嘗（な）めることになるだろう」。

予言は的中した。格差社会の到来だ。10年余り後の2006年刊の「悪夢のサイクル ネオリベリズム循環」では増え続ける非正規雇用とともに所得格差が開く実情をデータで示した。増大する貧困層、増える自殺…。バブルと破綻を繰り返す中で共同体が壊される構図だ。「市場が人間を支配する思想が背景にある」として市場原理至上主義、新自由主義をあげ、その源流を探った。

■ 共生経済という対抗軸

「経済学は誰のためにあるのか」という問いを胸に内橋さんは経済学者にインタビューしていく。宇沢弘文、岸本重陳、佐和隆光、熊沢誠、西川潤といった碩学（せきがく）たちだ。規制緩和礼賛論はあるべき日本経済論、社会論を見失っているのではないか。経済学はこれをどうたすのか。

「内橋さんは自由な一人の人間として、現在起こりつつあることを冷静な目で見て、アピリングな形で提示してくださる」。経済学者で最も深く通じ合ったのが宇沢さんだった。成長理論で業績をあげ、ソローやスティグリッツら名だたる経済学者に影響を与え、「ノーベル経済学賞に最も近い日本人」と目された数理経済学の泰斗だ。

宇沢さんが目指す経済社会の根幹として打ち出したのが「社会的共通資本」という概念だ。自然環境やインフラ、金融、教育、医療を経済学で捉え直し、「人間が人間らしく生きていける社会の器」「コモンズ」と位置づけた。市場は万能という言説への対抗軸であり、内橋さん提唱の共生経済と軌を一にするものだった。2人の対談は「始まっている未来 新しい経済学は可能か」として09年に刊行された。（加藤正文）

【規制緩和という悪夢】1995年刊。続編が「悪夢のサイクル ネオリベリズム循環」（2006年）。市場原理至上主義批判は内橋さんの終生のテーマとなった。「経済学は誰のためにあるのか」（1997年）もアカデミズムとジャーナリズムをつなぐ書。

【特集ページ】[経済評論家 内橋克人を読む](#)

(4) 大震災復興への警鐘 欠けていた「都市政策」

2022.09.07



阪神・淡路大震災から半年。講演する内橋克人さん。再生の行方を終生見続けた。「被災弱者の救済のあり方、人権意識、都市復興の進め方、全てが生身の人間を取り巻く現実となる」＝1995年7月、神戸市中央区



「叫び声も上げず、悲鳴もなく、恨みの言葉も吐かず、人も、大気も、故郷の街の全てが沈黙の闇に沈み始めている。被災地で目にしたのは、倒壊寸前、老醜をさらす実家ではなかった」

1995年1月20日。内橋克人さんは羽田空港から開港間もない関西空港に飛び、空港から船で神戸・ポートアイランドを経てようやく被災地にたどり着く。発生から3日。国道に連なる車列は「遺体搬送中」「救援物資運搬中」。前後で立ち往生する救急車、消防車。倒壊した阪神高速道路の橋脚が見える。

■インナーシティー問題

須磨・板宿出身の内橋さんは空撮映像を見て自分の体が裸にされるように感じたという。長田、東尻池、菅原市場。商店街、市場、長屋、ケミカル工場…。少年時代から路地の奥まで知り、街の変化も実感していた。「重要なのは職住の町を中心にしたインナーシティーが空洞化していたことだ。六甲山の北側に宅地造成が猛烈な勢いで進んだ。老夫婦と年寄りがあその地域の老朽住宅に残された。今回そこがやられた」

翌21日深夜、被災地で原稿を書き、送稿した。「壊滅の街から『都市と国家』を問い直す」。神戸市の行政理念だった「都市経営」の帰結として、住みよい安全な都

橋脚もろとも横倒しになった阪神高速道路神戸線。国道43号を西に向かうバイクや車両が走る＝1995年1月17日午後3時、神戸市東灘区深江本町

市になっていたのかと問いかけた。「神戸市株式会社」「公共デベロッパー」として一時代を画し、「山、海へ行く」と呼ばれた

開発手法で六甲山系を削り、人工島や西神、北神の大規模ニュータウンを造成した。博覧会も成功させた。都市経営は単に利潤を求め財政上の黒字を出すことを目的とせず、「最小の費用で最大の福祉を目指す」とうたったが、限界は時代とともに見え始めていた。

「神戸市が走り続け、その後をホンモノの企業が追う。自治体と企業との蜜月は、バブル崩壊に至るまでの『日本の長い虚の時代』を通じて続いた。バブル崩壊後、資産デフレの進む中、巨額の債務償還と利子支払いの負担は消えたわけではない」。そこに大震災が襲った。雨の中、無残な姿をさらす生家の前に立ち、犠牲者を悼みながら考えた。老朽住宅の建て替え、生活基盤の整備、住民の立場からの区画整理、病院機能の強化…。「神戸市に欠けていたのは『都市経営』のノウハウやその巧拙ではなく、真の『都市政策』そのものだったのではないか」

■ 悲愴的な無残

2月19日。ルポライターの鎌田慧さんと緊急対談する。刊行したのが「大震災 復興への警鐘」だ。鎌田さんが地震の続発に太平の終わりの、時代の予感がすると言うと、内橋さんは返した。「社会全体として、何か悲愴（ひそう）的な無残なものがあるような、そういう怖（おそ）れですね」

16年後の2011年3月11日。東日本大震災発生。巨大複合災害として原発事故を引き起こした。内橋さんには1986年刊の「原発への警鐘」というルポがある。周辺住民は突然の避難命令で自宅を追われ、警戒柵に遮蔽（しゃへい）されている。「その日までそこにあった『わがふるさと』に踏み入ることが許されない。格別の捜索隊の手で見出された亡骸（なきがら）との対面もDNA鑑定という責務に耐えなければならない。この無残を、私たち、私たちにつづく幾世代もの日本人は赦（ゆる）すことがあるだろうか」（加藤正文）

【大震災 復興への警鐘】1995年刊。阪神・淡路大震災をテーマに鎌田慧さんとの対談をまとめた。98年刊の「同時代への発言2 『消尽の世紀』の涯（はて）に」は震災やエネルギーの論集。内橋克人編の新書「大震災のなかで」（2011年）は東日本大震災発生時の提言集。いずれも岩波書店。

【特集ページ】[経済評論家 内橋克人を読む](#)

共生の大地へ 没後1年・内橋克人の歩いた道

(5) 90年代不況の帰結 働く者の尊厳見据えて

2022.09.09



NHK番組「クローズアップ現代」のキャスターとして内橋克人さんと向き合った国谷裕子さん。内橋さんの弱者へのまなざしを感じていた

「私たちは、いつ、どこで踏み迷ったのだろうか」。阪神・淡路大震災から3年たった1998（平成10）年。21世紀の入り口を前にして内橋克人さんは問いかけた。この年、刊行を始めた全8巻シリーズ「同時代への発言」の初巻「日本改革論の虚実」の一文だ。「いま、世紀末の森のなかで日本人は途方に暮れている。社会を見舞う“まさか”の異常時でさえ、いまは日常のものとなり始めた。日本経済の迷走を前に多くの日本人は辛（つら）く苦い呟（つぶや）きを心にくり返している」

■被災地の全日本化

90年代日本が重大な分岐点になる。そんな確信があった。バブルに踊り、「世界を超えた」という自賛論に酔い、行政や企業の不祥事が繰り返され、その果てに未曾有の金融危機が起き、銀行は破綻の淵にある。阪神・淡路大震災では職や家をなくした人があふれたが、いま各地で路頭に迷う人々のブルーテントが見える。底の見えないこの90年代不況は「被災地の全日本化」ではないか。

再生の処方箋として政府は矢継ぎ早に改革を行った。94年はスーパーの出店を容易にする大規模小売店舗法（大店法）の規制緩和、96年には派遣労働者の対象業種を拡大する労働規制の緩和。当時66歳の



90年代不況はより深刻化し、リーマン・ショックでは派遣切りなどが社会問題になった＝2008年、東京・日比谷公園、年越し派遣村

内橋さんが指摘した。「誰もが、先が見えない、という常套句（じょうとうく）を繰り返しつつ、この“90年代日本”をやり過ぎそうとしているのではないだろうか」

「改革という名のフィーバーも、規制緩和という万能論も、その虚実を見究（みきわ）めたいと希求している」

それから二十余年。市場原理に即した改革の結果、地域商業はぎりぎりまで追い詰められ、非正規雇用は増え続け、東京一極集中の裏側で過疎化、高齢化に歯止めがか

からない。

■弱者への共感

93年4月に始まったNHK番組「クローズアップ現代」で内橋さんは同14日に初登場した。以来、2014年10月30日まで計50回出演した。その21年間は阪神・淡路大震災、金融危機、リーマン・ショック、政権交代、東日本大震災といわゆる「平成ショック」が相次いで起きた。社会変動のたびに脅かされるのが雇用だ。「職なくば人間の尊厳もない」という信念が静かな怒りと化した。

当時キャスターとして向き合った国谷裕子さんは話す。「痛みを感じている人々が痛みすらも声を上げられない。自己責任が問われ、苦しい思いをされている人がその苦しさを声にならできない。そんな社会に内橋さんは憤りを覚えておられた」

取り上げたテーマは雇用、中小企業、商店街、町工場、貸し渋り、震災、集落崩壊、食、エネルギー…。揺れる同時代を共に見つめた国谷さんが感じたのは弱者への共感、それ故の切実さだった。「どうしたら働きがいのある労働がしてくれるのか、社会転換できるのか。とりわけ弱い人たちがマネーや規制緩和の勢いに翻弄（ほんろう）されないで生きていける社会とはを常に問いかけておられた」

生きる・働く・暮らす。この三つが結び付いた温かで勁（つよ）い社会を創造する。それが内橋さんの終生のテーマになっていく。（加藤正文）

【90年代不況】バブルの過熱に警鐘を鳴らした内橋克人さんは不況の長期化を予見し、「90年代不況」と名付けた。「同時代への発言」シリーズ初巻「日本改革論の虚実」（1998年刊）、第7巻「九〇年代不況の帰結」（99年刊）は規制緩和や改革の狙いを論じるとともに現状分析を行っている。岩波書店。

【特集ページ】[経済評論家 内橋克人を読む](#)

共生の大地へ 没後1年・内橋克人の歩いた道

(6) 原発への警鐘 「帰らざる河」 渡った末に

2022.09.14



記者会見で「原発にさようなら集会」について説明する
(左から) 鎌田慧さん、澤地久枝さん、内橋克人さん = 2011年6月、東京都千代田区



原発問題の連載を単行本にまとめたころ。当時52歳。精力的に取材に飛び回っていた = 1984年、米ボストン (提供)

シビアアクシデント。原子力発電所が設計時の想定を超えて過酷な状態に陥る事故のことだ。米スリーマイルアイランド原発事故（1979年）、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故（86年）、東京電力福島第1原発事故（2011年）が該当する。

内橋克人さんはスリーマイルアイランド事故から3年後の1982（昭和57）年、「週刊現代」で原発をテーマに長期連載を始めた。終生、原発の危険性を指摘し続けたが、その原点となった取材だ。「いわゆる原発賛成派でもなければ、まして反対派でもなかった。どちらからの情報もマル呑

（の）み込みせず、自分の目と足と頭で冷静に確かめる、というエネルギーを、原子力発電に対してさし向けた、ただそれだけだった」

■スロー・デス

技術、放射線と人体、補助金、PR戦略、政権与党との関係、発電コスト比較…。地域開発は人を幸せにするのか。その筆は次第に厳しさを増す。後の過酷事故を予見したかのように福島第1原発の取材は詳細をきわめた。地元福島県

双葉町の町会議員の言葉をすくいあげる。「ホントに原発が安全なら、東京のまん中だってできるだろうに…」

1年余に及んだ連載で内橋さんが衝撃を受けたのがピッツバーグ大のマンクローズ医学博士の警告だった。発がん物質の人体への影響を分析疫学の手法で調べた研究者でアスベスト（石綿）研究でも知られた。約30年間に原発で働いた労働者約2万5千人を調べた結果、がん発症の確率が高いことを突き止め、被ばくによる健康影響を示した報告を出す。「被ばくはスロー・デス（時間をかけてやってくる死）を招く」「狭い日本でもし原発事故が各地に広がった場合、一体日本人はどこに避難するのか」。博士の指摘が切実に響く。

見えてきたのは安全神話がつくられていく構図だ。「国がやることだから大丈夫」と鳴らされる国策の太鼓。著名人にヘルメットをかぶせて構内で撮影し、安全性をPRさせるメディア戦略。「恐るべき『日本的曖昧さ』と『無知の傲慢（ごうまん）』」に支援されて、ひとり原発は肥大化のピッチを上げ、立ち止まる暇も振り向く余裕もないまま、日本人は原発超大国への帰らざる河（かわ）を渡ってしまった」

■合意なき国策

2011（平成23）年3月11日。東日本大震災発生。巨大複合災害として福島第1原発事故が起きた。幾多の警告が葬り去られた末の「人災」だった。人々の魂に根差す平衡感覚、鋭敏な危険察知能力、生あるものに必須の畏怖（いふ）心。事故が示したのは「それらすべてを焼き固め、鋳型の中にねじ伏せて突進しようとする剥（む）き出しの権力の姿に違いない」。6月15日、記者会見の席に内橋さんの姿があった。作家澤地久枝さん、ルポライター鎌田慧さんとともに声を上げた。「原子力政策は合意なき国策だ。活動期に入った地震列島日本を原発過密列島にしてはならない」

それから11年が過ぎた。政府はこれまで新增設や建て替えは想定しないとしていたが、次世代型原発の建設を検討する方針だ。回帰というべきエネルギー政策の転換が行われようとしている。（加藤正文）

【原発への警鐘】1986年、講談社刊。雑誌連載をまとめて84年に刊行した「日本エネルギー戦争の現場」を文庫化した。福島第1原発事故の際は同書を部分収録した「日本の原発、どこで間違えたのか」を出した。朝日新聞出版刊。原発を取り巻く状況を多角的に取材・分析し、安全神話に警鐘を鳴らした。

【特集ページ】[経済評論家 内橋克人を読む](#)

共生の大地へ 没後1年・内橋克人の歩いた道

(7) 周縁の条理 もう一つの日本は可能だ

2022.09.16



保存された渚滑線のレールと標識。内橋さんは地域再生に挑戦する住民たちの姿を追った（北海道滝上町提供）



各地を取材で訪れた内橋克人さん。「海や山を視界の隅にとらえながら、すでに始まっている未来を現実の中に探したい」と願った（提供）

北海道の北東の端、オホーツク海沿岸から渚滑川（しよこつがわ）に沿って奥に入る。滝上町（たきのうえちょう）。ここにかつてあった駅を保存した記念館がある。小さな駅舎、線路、駅名標識…。赤字ローカル線廃止対象として鉄路が消えてから約10年後の1994（平成6）年、内橋克人さんが取材に訪れた。

鉄道を失った町は自立の道を選んだ。平成の大合併に抗（あらが）い、芝桜の名所として人を集め、赤い三角屋根の建物を配して「童話村」をテーマにまちづくりに取り組んだ。「都へと繋（つな）ぐ心の絆を失った同じ境遇の過疎地、中山間地、僻（へき）地、また地場産業を訪ね、荒い時代の風に立ち向かう人びとの悲嘆と勇気、逞（たくま）しい想像力、健気（けなげ）な日常の物語を紡いだ」。日本経済新聞で連載された「共生の大地」は

注目を集め、岩波新書になった。滝上町のルポを収録した章を「『辺境と周縁』の条理」と名づけ、扉に廃線駅の写真を載せた。

■生きる・働く・暮らす

95年の阪神・淡路大震災以降、論調に変化が出てくる。規制緩和に舵（かじ）を切った90年代の長期不況の実態を見据えた後、市場原理一辺倒からの脱却の意義を

確信に満ちて唱えるようになった。著書が続いた。「浪費なき成長」「〈節度の経済学〉の時代」「もうひとつの日本は可能だ」「共生経済が始まる」…。当時、市場原理の対抗思潮として経済学者の宇沢弘文さんは社会的共通資本、宮本憲一さんは内発的発展、維持可能な社会を打ち出した。時を経て気候危機が差し迫った現代、斎藤幸平さんは資本主義に代わる道として「脱成長コミュニズム」を主張した。

そうした未来図を内橋さんはいち早く感知していた。私たちの社会には二つの日本がある。市場原理を至上とする競争セクター。生きる・働く・暮らすの三つが地域で重なり合う共生セクター。周縁に目を凝らし、周縁に向かう。「一つの日本ともう一つの日本を分かち断崖の裂け目はいよいよ地殻の奥底にまで達したように私には思われる」

■ F E C 自給圏の形成

当時、NHK番組「クローズアップ現代」のキャスターを務めた国谷裕子さんに刻まれているのがF E C（フェック）自給圏という構想だ。フーズ（食料・農業）、エネルギー、ケア（介護・コミュニティー）の三つを地域内で自給していく社会。「この三つは市場原理に委ねてはいけないんだ、市民が手放してはいけないんだということ」を四半世紀も前に言いだしておられた」

東日本大震災の起きた2011年の10月17日放送の「自給力～食とエネルギーを自給する暮らしの可能性」で新たな動きを示す映像の後、内橋さんは「これはノスタルジアではなく日本の未来を先取りした姿だ」と述べた。国谷さんは振り返る。

「F E Cは基礎的な生存条件であり、そこにこだわることで地域に基幹産業も生み出せ、雇用機会も生まれ、尊厳ある労働につながる。必要なのが自覚的消費者だ。一人一人が、考える消費者になって『買う』という行為で地域を支えよう。内橋さんが繰り返して伝えてくれたメッセージだ」（加藤正文）

【F E C自給圏の形成】フーズ、エネルギー、ケアの頭文字を合わせた。内橋克人さんが提唱した自給自足圏を基礎にした経済社会。「浪費なき成長」（2000年、光文社）などに詳しい。「共生の大地」（1995年、岩波新書）、「同時代への発言 6 周縁の条理」（99年、岩波書店）は地域再生の胎動を描く。

【特集ページ】[経済評論家 内橋克人を読む](#)

共生の大地へ 没後1年・内橋克人の歩いた道

(8) 「人間復興」の経済を目指して 「頂点同調主義」の危うさ

2022.09.21



神戸空襲の体験を語る内橋克人さん。「頂点同調主義にからめとられた私たち日本人の弱さ。再びその兆候が色濃く突出してきた」＝2005年8月、神戸市中央区



未明の大空襲で建物が焼け落ち煙がくすぶる中を行き交う市民ら＝1945（昭和20）年3月17日、国鉄元町駅から西を望む

2005（平成17）年8月20日午後。郵政解散に打って出た小泉純一郎首相（当時）が神戸・元町を遊説に訪れ、大観衆を前に演説した。同じころ内橋克人さんは近くのホールで語りかけていた。「今、満員のこの会場こそ声なき人々の声、力なき人々の力で満たされている」。神戸大空襲を語る会での講演だった。

その60年前の3月17日。大空襲で神戸の西半分が焼かれた。死者2600人以上。当時12歳の内橋さんはその前日、虫垂炎を発症し入院した。本来座るはずだった自宅裏の防空壕

（ごう）の席に母親代わりのような女性が座った。そこに焼夷（しょうい）弾が直撃し、壕は崩れた。父が掘り返した。「身を少し傾け、泥にまみれ、眠ったように座っていた。打たれた肩の形は崩れ、赤黒いものが左半身をべったりと覆っていた」（「荒野渺茫（びょうぼう）」）。身代わりによって自分の生がある。終生、胸に抱き続けた。

■権論と民論



作家・城山三郎さん

「改革なくして成長なし」「自民党をぶっ壊す」…。小泉流政治に国民は喝采を送り、時代の流れが大きく渦巻いた。これを時の政権、権力、支配層の利害を代弁する「権論」と呼んだ内橋さんは市井の「民論」の立場から批判した。「『官から民へ』というが、その民の中に市民、国民は入っているのか。民とは民間巨大資本のことではないか」

権論によって増幅される時代の流れ。異を唱えるものは排除される。

「戦争前、扇動に乗せられた国民は熱狂し、『鬼畜米英を撃て』と叫び、街なかを行進した」。少年の目に刻まれた光景。権威、権力に弱く、自ら上に合わせていく。そうした日本人の心性

を哲学者久野収さんは「頂点同調主義」と呼んだ。危うさを知る内橋さんは繰り返した。「私たちの社会は戦前戦後変わっていない」。強いものに弱く、弱い者には強い。なぜノーと言えないのか。「私はここにこそ大きなテーマをみている」

■城山三郎さんとの対話

敬愛し、対話を重ねたのが5歳年上の作家城山三郎さん（1927～2007年）だった。少年兵に志願した海軍で徹底的に個を押しつぶされた。組織のために虐げられる個人。戦後社会も個が置き去りにされる。組織と個人をテーマに経済小説の新境地を切り開いた。自由な個を脅かす風潮と対峙（たいじ）し、晩年には個人情報保護法の制定時に「言論弾圧につながる」と反対の論陣を張った。「戦争で日本が得られたものは憲法だけだ」が持論だった。

内橋さんは城山作品を読み解き、戦争と国家と並ぶ重要な柱として経済恐慌に注目した。昭和恐慌から開戦に至った道筋を踏まえ、バブル崩壊後の90年代不況がなぜ平成恐慌に至る手前で防ぐことができたのか。「戦争放棄の憲法9条、生存権の25条が歯止めになった」と言うとき城山さんは返した。「全く同感だ」

2人は雑誌「論座」の企画で3回にわたって対談した。大失業時代、敗者復活のある社会、昭和恐慌と平成恐慌－をテーマに語り合い、対談集「『人間復興』の経済を目指して」を出した。

(加藤正文)

【「人間復興」の経済を目指して】城山三郎さん、内橋克人さんの対談集。2002年、朝日新聞社。ほかに2人の対談は「失われた志」（文春文庫、00年）にも収められている。内橋さんの戦争体験は自伝的小説「荒野渺茫（びょうぼう）」（岩波書店、13年）に詳しい。

【特集ページ】[経済評論家 内橋克人を読む](#)

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/bizplus/uchihashikatsuto/202209/0015657548.shtml>

3/3

もうひとつの経済学「理念型経済学 -市場主語から国民主語の経済-」の提唱
矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義」に対抗する経済 これらの自立・自給がはじくと 国際マネーの覇権となる



もうひとつの経済学

理念型経済学
FEC自給圏
FOOD
ENERGY
CARE
経済を創造する

トリクルダウン効果の枠組みが完全に崩れており、国際競争力・市場主義を楯に企業・金融優遇の政策の中で 国民の閉塞感と不安感はぬぐえない。
国際企業・金融依存から脱し、特に 現日本の社会の自己矛盾を生んできた源 食糧・エネルギー・高齢化(介護・医療)の分野で自立してゆく以外に、新しい日本構築の道はない。

- 自給自立型農業の構築
「ゆず」栽培から加工で30億円規模に成長した高知黒馬路村
- 自給率数百パーセントが市民共同発電など自然・再生可能エネルギーで自給率200パーセントを達成したデンマーク
- 介護・医療は今やビジネス構築の必要な先端産業

「理念型経済学 -市場主語から国民主語の経済-」の構築の実現は可能
矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義」に対抗する経済
これらの自立・自給がないと 国際マネーの覇権



「人間復興」の経済を目指して

共生の大地へ
没後1年・内橋克人の歩いた道

2009年、平成21年8月20日午後、郵政省で行った小冊子「共生の大地へ」の出版記念イベント。内橋克人（左）と作家城山三郎（右）が参加した。このイベントで、内橋克人は「人間復興」の経済を目指して、共生の大地へというテーマで講演を行った。城山三郎は、内橋克人の講演を聞き、その内容について感想を述べた。

「人間復興」の経済を目指して

頂点同調主義の危うさ

城山三郎さんの対談

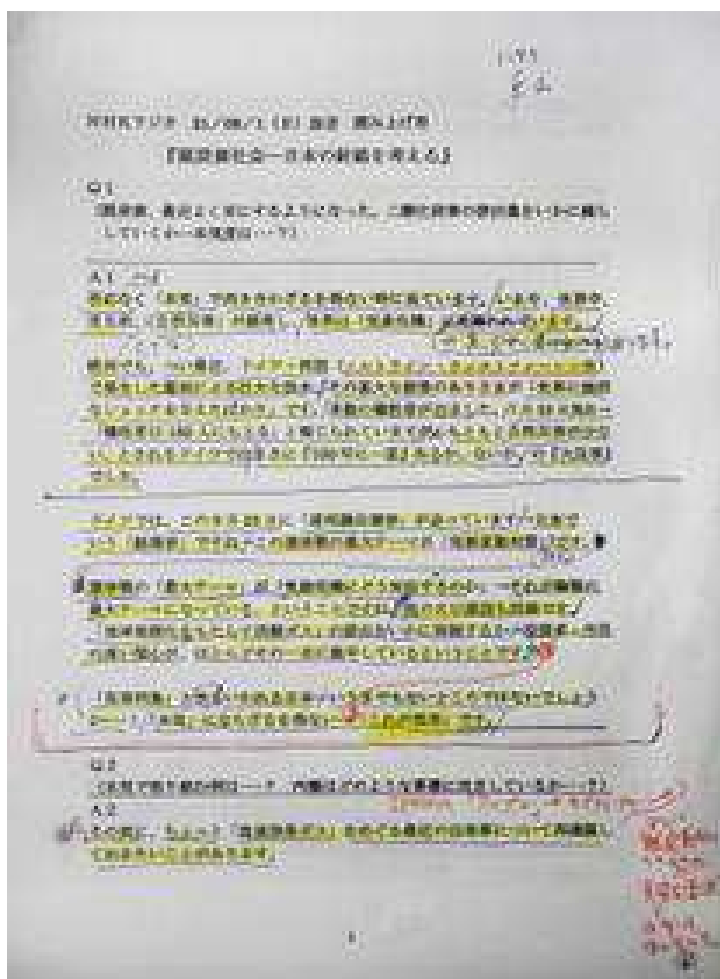
加藤正文

(9) 民主主義をあきらめない 状況に強い危機感最期まで

2022.09.23



若き日の内橋克人さん。神戸新聞記者時代にたたき込まれた「記者三訓」を胸に取材に飛び回り、数々の著書を出した(提供)



神戸市須磨区で生まれ育った内橋克人さんは海が好きだった。約30年暮らし、終(つい)の棲家(すみか)となった神奈川県鎌倉市の自宅。海が見たくなると由比ヶ浜海岸まで歩いた。

その鎌倉で作家井上ひさしさん、精神科医なだいなださんと連名で呼びかけ人となり、2005(平成17)年に「鎌倉・九条の会」ができた。その後、10年に井上さん、13年、なださんが亡くなった。発足10年を記念した15年5月の会で内橋さんは話した。「大切なお二人の姿はすでになく、悲しく、寂しく、私は立ちすくむ思いでここにいます」

差し迫る時代状況に危機感が強まっていた。当時の安倍晋三首相は集団的自衛権行使を容認する安全保障関連法の成立へ躍起になり、反対論を押し切る形で14年7月、憲法9条の解釈変更を閣議決定し、15年9月に成立させた。国会周辺には「戦争法案、絶対反対」のコールが響いた。「一本一本の花を引き抜く、そういう時代がこの日本社会にもやってくるかもしれない。けれども、どんなに強い権力をもってしても、やってくる春

書斎の机の上に置かれた最後のラジオ出演の原稿。番組のファンは多く、亡くなった後は3回にわたってアンコール放送があった＝神奈川県鎌倉市



講演する内橋克人さん。晩年、兵庫で話すとひとときわ熱い思いがこもった＝2018年11月、姫路市

を止めることはできない」。講演はブックレット「民主主義をあきらめない」に収録された。

■最後まで発言

21年7月2日、89歳になった。体調がすぐれず、月末、心臓が苦しくなったが、病院に行かず横になって過ごした。8月1日朝、NHKラジオ「マイあさ！」に出演した。柔らかで本質を突くラジオでの経済評論は人気で長年続いていた。この日のテーマは「脱炭素社会－日本の針路を考える」。質問と回答を書いたシナリオに、聞き取りやすいように区切りの記号も入れ、強調すべき箇所はひとときわ濃く蛍光ペンを引いた。気候変動に伴い世界各地で自然災害が頻発している状況から説き起こし、温室効果ガスの削減に触れ、とりわけ「石炭火力」の問題に鋭くメスを入れた。

1982（昭和57）年に原発を取材し「原発への警鐘」を刊行。エネルギー

を取り巻く政官財の問題に精通していた。「日本では口では『脱炭素』を唱えながら実際には例えば『効率的な火力発電へシフト』などと平気で口にする識者が大手を振っているありさまです」と書かれたシナリオにペンで書き足した。「石炭火力をどう見直していくか。今朝のテーマもそれに尽きると思います」

放送3日後の8月4日、急性心筋梗塞で救急搬送され、入院。9月1日、息を引き取った。最期まで書きたいという思いだったという。



今年7月末、一周忌を前に内橋さんのお宅を訪ねたとき、書斎に向かう廊下の棚に封筒が立てかけてあるのに気付いた。表紙には自筆で「記者三訓 ジャーナリストの心構え」と書かれていた。1957年、神戸新聞で記者として歩き出したころ先輩からたたき込まれた鉄則だという。「必ず現場へ行き、自分の目で確かめろ」「上（権威や上司）を向い

て仕事をするな」「攻める側ではなく、攻められる側に最後まで踏みとどまれ」。この三訓を胸に戦後社会の険しい道を歩いた。首尾一貫した見事な人生だった。（加藤正文）

=おわり=

【民主主義をあきらめない】岩波ブックレット、2015年刊。鎌倉・九条の会で行った講演を収録した。同会は05年発足。大江健三郎さん、内橋克人さんらの講演を収録した同ブックレット「取り返しのつかないものを、取り返すために」（11年）もある。

【特集ページ】[経済評論家 内橋克人を読む](#)



共生の 大地へ

没後1年
内橋克人の歩いた道

共生の大地へ 没後1年・内橋克人の歩いた道

9月1日で没後1年になる。戒名は「志峯院厳岳良克居士」。高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫（びようぼう）たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。

- ＞（1）荒野渺茫（びようぼう） 筆一本、真っすぐに生きた 2022/09/01
- ＞（2）匠の時代 地域と響く「実の技術」 2022/09/02
- ＞（3）規制緩和という悪夢 経済学の在り方を問う 2022/09/03
- ＞（4）大震災復興への警鐘 欠けていた「都市政策」 2022/09/07
- ＞（5）90年代不況の帰結 働く者の尊厳見据えて 2022/09/09
- ＞（6）原発への警鐘 「帰らざる河」渡った末に 2022/09/14
- ＞（7）周縁の条理 もう一つの日本は可能だ 2022/09/16
- ＞（8）「人間復興」の経済を目指して 「頂点同調主義」の危うさ 2022/09/21
- ＞（9）民主主義をあきらめない 状況に強い危機感最期まで 2022/09/23

色とりどり5色のヒガンバナが、加古川市志方町広赤屋の円照寺境内に彩っている。一般的な赤をはじめピンク、オレンジ、白、黄の約千株が見頃を迎え、参拝者を楽しませている。

上月、義宗任職(75)が約20年前に栽培を始め、珍しい品種をインターネットで購入するなどし、現在では約3千株が植えられている。中でもピンクの花は珍しく、関東から訪れる愛好家もいるそうだ。

開花後は気温により5〜7日は持つという。小野市から訪れた生花店の販売員中野鈴子さんは「5色のヒガンバナは想像以上にきれい」と感激していた。

9月末まで観賞できるという。円照寺 ☎079・452・2067

加古川・円照寺で見頃

9月23日

金曜日

 **神戸新聞社**
〒650-8571
神戸市中央区東川崎町1-5-7
電話 (078) 362局

報道部 7040	文化部 7041
経済部 7094	販売部 7066
運動部 7095	事業部 7088
視 像 7047	メディア 7081
写真部 7047	ビジュアル 7081

読者本部お客さまセンター
078-362-7056
月・金 10～17時（土日祝休）

神戸新聞

正平調

調平正

秋の彼岸はヒガンバナの開花と歩調を合わせてやってくる。先週、奥播磨を訪ね、田んぼの畦に咲き始めているのを見た。きょうは秋分の日だから、今が満開だろう◆曼珠沙華の別名があり、古来不吉なイメージもつきまとうてきた。多年性の球根植物で、球根にリコリンという毒を含む。そのせいでモグラやネズミを遠ざけるから、昔の人が農作物の害獣対策に活用した。田んぼの畦でよく見かけるのはそのため◆お墓の周りに多いのも、土葬の時代に小動物の侵入を防ぐ知恵だった。鮮やかで妖しい朱色の花が並ぶと、あの世とこの世を隔てる赤い道のようでもある◆コロナ禍が生んだサーブスは多いが、「オンライン墓参り」にはさすがのご先祖さまも驚いただろう。高齢の親と会うのを心配した人が、代行業者のネット中継を通じてお参りするという。墓の清掃もしてくれるそうで、ありがたいには違いない◆わが実家では、喜寿を過ぎた母親を交え「墓じまい」の話題も出るようになった。生まれ育った町と働き暮らす町が遠く離れた人には切実な問題だ。これでいいのかと皆が自問しながら、先祖供養の在り方も変わり始めている◆へ人間の道はここまで曼珠沙華、星野早苗。深まる秋の始まりに彼岸と此岸の境を考える。

2022.9.23

2022.9.1.内橋克人氏没後1年 By Mutsu Nakanishi

「経済評論家 内橋克人氏 逝去」の訃報に接して 懐い出すままに

<https://infokkna.com/ironroad/2021htm/2021mutsu/fkobeR0310.pdf>

追悼

神戸新聞

9.5.11

◎ 附錄

· 科学出版社

内橋克人さん死去

89/82

A black and white portrait of an elderly woman with short, light-colored hair and glasses. She is wearing a dark, high-necked garment. Her hands are clasped together in front of her, resting on a surface. The background is dark and indistinct.

神奈川県鎌倉市の自宅で
インタビューを受ける内
藤倉さん。2017年4月

[illegible]

人重視の経済に信念

内橋克人さん死去

評註 市場原理主義に警鐘



神戸新聞の経済部は「過剰的」

神楽川原産魚の成魚でインゲンビョウに似た中絶育のオス・メス2匹を飼育中

格とる本有れ機が数程見ゆ

[illegible]

卷一百一十五

[illegible]

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

[illegible][illegible]

學士 王 士禛

大正
昭和
民國
光緒
宣統

治之

つた

● 最も効果的な方法

和鉄の道・Iron Road

経済評論家 内橋克人氏の評論他 関連資料掲載記事リスト

2022.9.1.内橋克人氏没後1年 By Mutsu Nakanishi

■2021.9.5. 内橋克人氏逝去追悼記事 内橋克人氏主要業績紹介

■2012.1.1. 年の初め 内橋克人氏の100年後へのメッセージ

ホームページ「和鉄の道・Iron Road - from Kobe」に掲載紹介してきた内橋克人氏の記事リスト

◎和鉄の道・Iron Road - 2012年の初めにより

内橋克人氏「100年後へのメッセージ」

<https://infokkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf>

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2012年1月

厳しさを力に 経済評論家 内橋克人氏100年インタビューに共感して by Mutsu Nakanishi

<https://infokkna.com/ironroad/2012htm/2012mutsu/fkobe1201.pdf>

参考添付 内橋克人 NHK BS 2011.12.18. 放送「内橋克人 100年インタビュー」視聴メモ

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2013年8月より

あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮

NHK 朝一番 ビジネス展望 内橋克人氏の解説を紹介

創造性の欠如した今の時代に異常気象にだまし絵をダブらせ今一番自分 にずっと入る

<https://infokkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1308.pdf>

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2013年9月より

新書 藻谷浩介・NHK広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の紹介

今 日本で一番求められている地域を元気にする

日本再生への道「里山資本主義 & 内橋克人氏の提案する地域自立自給経済圏」創設の実践

<https://infokkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1309.pdf>

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2018年12月より

日本の行く先がおもしろやられる師走 数か頻りの薄っぺらな社会からの脱出へ 若者たちへの思いが募る
こんな思いを代弁して、神戸新聞 内橋克人氏ほかの評論にも

<https://www.infokkna.com/ironroad/2018htm/2018mutsu/fkobe1812uchihashi.pdf>

if

戦後 日本が歩んだ道 NHK BS 2011.12.18. 「内橋克人100年インタビュー」より

■ 戦争時代の反省 戦中・戦後 そして 今も続く社会構成の原点 日本人気質

- 頂点同調主義

- 熱狂的な等質化現象 リーダーにゆだねる・異を排する

■ 1960年代

高度経済成長 頂点同調主義・等質化の中で謳歌した高度成長

- 技術革新・技術力による生産量と質の著しい向上

- 公害ほかの矛盾に蓋をした成長

- ・ 生産効率・物づくりに特化した改善技術の開発 独創性のなさが弱点

- ・ 基礎技術・革新技術開発の遅れ

世界一の技術立国日本の謳歌 ⇔ 異を唱えられぬ日本の社会

■ 1970年代後半

石油ショックによる原油価格の急騰 「狂乱物価」とインフレ・構造不況へ突入

1974 第一次石油ショック・中東戦争 ・成長産業が素材産業から加工組立て産業へシフト

1979 第二次石油ショック・イラン革命 ・厳しい国際競争にさらされる

■ 1985年～2008年 バブル経済とその終焉 不況克服のための規制緩和と大型金融改革の時代

1986～ バブル景気 マネー資本主義の時代へ

アメリカ型資本主義 株価至上主義

1991 バブルの崩壊

■ 1990年代～ 不況克服へ 規制緩和と企業国際化の急速展開

2001 エンロンの破たん

2000～ 雇用不安など社会問題急拡大 企業の国際化急展開

非正規雇用

外国人投資の急上昇

■ 2011年 東日本大震災・原発事故 そして年金問題と破綻寸前の国家財政 急激な円高 政治の貧困

日本経済の疲弊と格差拡大 企業の海外移転の急拡大

舵取りのなき日本に先行きが見えず 社会全体に広がる閉塞感・不安感

グローバル化 市場原理主義経済

効率化・国際競争力

金融のビッグバン強欲資本主義へ

グローバル化の名のもとアメリカ中心

の枠組に日本が飲み込まれてゆく

もうひとつの経済学「理念型経済学 -市場主語から国民主語の経済-」の提唱

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済」 これらの自立・自給がないと 国際マネーの餌食となる



トリクルダウン効果の枠組み今完全に崩れ去っており、国際競争力・市場主義を楯に企業・金融優遇の政策の中で 国民の閉塞感と不安感はぬぐえない。
国際企業・金融依存から脱し、特に 現日本の社会の自己矛盾を生んできた源 食糧・エネルギー・高齢化[介護・医療]の分野で自立してゆく以外に、新しい日本構築の道はない。

「理念型経済学 -市場主語から国民主語の経済-」の構築の実現は可能
矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済」
これらの自立・自給がないと 国際マネーの餌食となる



- 自給自立型農業の構築
「ゆず」栽培から加工で30億円規模に成長した高知県馬路村
- 自給率数百パーセントが市民共同発電など自然・再生可能エネルギーで自給率200パーセントを達成したデンマーク
- 介護・医療は今やビジネス構築の必要な先端産業



- 頂点同調から脱して声をあげよう
- 賢さを伴った勇気を
市場主語から国民主語の経済構築へ

7月16日早朝 NHKラジオ朝一番 ビジネス展望

『働き方の多様化とは何か』内橋克人 2013.7.16.

内橋克人さんのビジネス解説 実に明快分かりやすい解説に
私には一番ずっと入ってくる話になるほどと。

- ◎ 多様な働き方・雇用・労働の多様化「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う
- ◎ 正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。
「日本ではこれが、ごっちゃにされて 都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。
同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、
雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。
正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、
いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。

内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、

「国際競争力をつけるようなグローバル スタンダードが
非正規雇用を増やすことだとの錯覚を日本では植えつけられているが、
けっしてそんなことはない」

と欧米の具体的な事例をひいて言う。

- ◎ 例えば、『オランダモデル』の例示

同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。

均等待遇の上に立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の2種類しか労働は存在しない。



目立つ内外の食い違い 針

国を危うくする言い繕い

「Trade Agreement」
「on goods」を略して「T.A.G.」(日本製・商標)である。安藤首相が繰り返す「自由貿易協定」とは全く異なる「特恵通関にわたる」つまり出たれた。かなかに記者会見のフンス氏発言は「Bilateral Trade Agreement」(二国間通商協定の意)という

李子(李仁)G. 次いで「T.A.G.」
国は通商政策を真の祖いとする安藤界のこの「設断分輪方式である。日本国境へ食い違いあり」とな
て、その実、ひまかな「自由貿易協定」である、とも安藤首相は
果す、明かに。協定協定の大幅
譲歩は、たゞ既定路線だ。

「つたは「自由貿易」は「T.A.G.」
大抵協定の首脳協定においてわ
明かした。

路21

針路2

没後1年・内橋克人の歩いた道

若年代半ばはより深刻化し、リーマン・ショックでは所産切りなどが社会問題になった

働く者の尊厳見据えて

『働き方の多様化とは何か』内橋克人 2013.7.10.

◎ 多様な働き方・雇用・労働の多様化(働き方の多様化)と「働き方の多様化」は違う
◎ 正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。
『日本ではこれが、ごっちゃにされて 都合よく使われて、今の新しい社会状況を生んでいる。
同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、
雇用保障や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。
正社員以外の働き方が増える事をもって「働き方の多様化」とするような考え方が、
いかに働く人の現実から遠い議論か、改めて分かってであろう。』と、
内村克久氏は「執照くば人間の尊厳もない」働くとはすなわち、人間がどう生きるかという
問題である」と説き、

「国際競争力をつけるようなグローバルスタンダードが、非正規雇用を増やすことなどの錯覚を日本では植えつけられている。けっしてそんなことはない」と欧米の具体的な事例をひいて言う。

◎ 例えば、「オランダモデル」の例示
同一労働同一賃金を前提にして、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。地域格差の上に立った長時間労働と正社員と、短時間労働制社員の2種類の労働は存在しない。

保存された遠東線の5.0kmと、横内、内蔵、八尾の3箇所に展開する自然開拓の姿を辿った（北海道道、上野幌線）

もう一つの日本は可能だ

戦後 日本が歩んだ道 NHK BS 2011.12.18 「内閣府 100 年インタビュー」より

- | | |
|---------------|---|
| ■ 戦争時代の反省 | 戦中・戦後 そして 今も続く社会構成の原点 日本人気質 <ul style="list-style-type: none"> ● 頂点同調主義 ● 熱狂的な等質化現象 リーダーにゆだねる・異を排する |
| ■ 1960年代 | 高度経済成長 頂点同調主義・等質化の中で謳歌した高度成長 <ul style="list-style-type: none"> ● 技術革新・技術力による生産量と質の著しい向上 ● 公害律法の矛盾に蓋をした成長 <ul style="list-style-type: none"> ・ 生産効率・物づくりに特化した改善技術の開発 独創性のなさが弱点 ・ 基礎技術・革新技術開発の遅れ 世界一の技術立国日本の謳歌 ⇨ 異を咽えられぬ日本の社会 |
| ■ 1970年代後半 | 石油ショックによる原油価格の急騰 「狂乱物価」とインフレ 横溝不況へ突入 <ul style="list-style-type: none"> 1974 第一次石油ショック・中東戦争・成長産業が素材産業から加工組立て産業へシフト 1979 第二次石油ショック・イラン革命・激しい国際競争にさらされる |
| ■ 1985年～2008年 | バブル経済とその終焉 不況克服のための規制緩和と大型金融改革の時代 <ul style="list-style-type: none"> 1986～ バブル最盛期 マネー資本主義の時代へ
アメリカ型資本主義 株選至上主義 1991 バブルの崩壊 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> グローバル化 市場原理主義経済
 効率化・国際競争力
 金融のビッグバン 徹底資本主義へ
 グローバル化の名のもとアメリカ中心
 の特権に日本が飲み込まれてゆく </div> |
| ■ 1990年代～ | 不況克服へ 規制緩和と企業国際化の急速展開 <ul style="list-style-type: none"> 2001 エンセンの破たん 2000～ 雇用不安など社会問題急拡大 企業の国際化急展開
非正規雇用 外国人投資の急上昇 |
| ■ 2011年 | 東日本大震災・原発事故 そして年金問題と破綻寸前の国家財政 急激な円高 政治の質落
日本経済の虚勢と格差拡大 企業の海外移転の急拡大
乾取りのなき日本に先行きが見えず 社会全体に広がる閉塞感、不安感 |

グローバル化 市場原理主義経済
効率化・国際競争力
金融のビッグバン 強欲資本主義へ
グローバル化の名のもとアメリカ中心
の路線に日本が飲み込まれてゆく

【参考】■【2021年10月 From Kobe】内橋克人さん逝去に想いをつのらせて 想いだすままに
常に現場に立ち、自分の眼で確かめ、権威におもねず、攻められる側に身を置く視点
「現場・人間主義」を貫いた巨星 by Mutsu Nakanishi

添付「和鉄の道- from Kobe」に掲載紹介してきた 内橋克人氏の記事リスト

<https://infokkna.com/ironroad/2021htm/2021mutsu/fkobeR0310.pdf>